

## 23 清医趙淞陽について

一七二六—一七二九年の長崎での逸事—

○郭<sup>1)</sup> 秀梅・岡田<sup>2)</sup> 研吉

江戸幕府が清国の医師を招聘して、医学教授に当たらせられたことについてこれまであまり注目されていなかった。しかし、前総会で清医胡兆新の来日、日本人医師との交流について報告し、今回また享保年間に来日した趙淞陽について報告することで、江戸期の清日医学交流の実体を明らかにしたい。

趙淞陽は三年近く滞在したが、趙淞陽の活躍は書物に散見されるだけである。本報告はこれらを調査した結果に基づき、趙淞陽について長崎につたわる逸事をまとめて報告する。

『長崎年表』『長崎年表擧要』によると、趙淞陽は享保十一年(一七二六)十月九日、二六番南京船で長崎に到着、享保十四年八月二八日、四番廈門船で帰国している。

趙淞陽は名を天潢、字を錫爵、潤周、号を淞陽、玉峯、杏圃と称した。蘇州崑山縣の人で、医業が三代続いた家柄であった。来日時は六三歳。同行者は高輔皇、甥の呉宿来及び使用人の徐安達であった。四人は入港後、大通事河間八平次宅に滞在を命じられた。

享保九年、幕府は中国に大量の医書を注文した。唐商船が医書を舶載して、利益を得たが、来日した医者達も書籍を持参し、譲渡した。特に享保十一年以降、漢籍の新本がかなり日本へ流入した結果、漢方の医学界にも影響を与えたが、その時に将来されたものが孤本、珍本として現存している。

『舶来書目』の所載によると、趙淞陽は『字彙』『類経』『傷寒論』『医門法律』『景岳全書』『証治準繩』『本草綱目』など二一種の書籍を持参した。趙淞陽が在日した三年間の行動の記録は『唐医趙淞陽文録』として残る。

「文録」は修琴堂蔵書として現存するが、それは天明七年(一七八七)の写本である。「文録」は病例、文書、問単から構成される。その記載から、趙淞陽が官許を得て、唐館を出て、民間の診療を行ったことが判明した。病例

は享保十一年から十二年の間の診療記録である。文書は趙淞陽が持参した薬品などを販売する許可の請願書であり、問單は臨床問診の口訣である。質問は頭から大小便ないし女科まで合わせて十八問からなる。

また、佐井聞菴の『傷寒論私撰』に趙淞陽の記事がある。それは、寛延辛未（一七五二）夏六月、趙淞陽が長崎に来て、診療時に常に「仲景診脈図」を座右に掛けて、「この図は官府が所蔵した五百年前の物で、皇帝から賜ったものである」と語ったと記し、模写された「仲景診脈図」を収めている。『日本医譜・佐井聞菴』には、佐井聞菴が趙淞陽の自筆問單を旧蔵して、「此実有益之物也」と記す。その内容は「文録」の問單と同じようなものである。

ちなみに、嘉永四年（一八五二）に刊行された伊藤鳳山の『傷寒論文字考』に、伊藤鳳山が友人唐沢徳夫の求めを応じ、「仲景診脈図」の臨床的価値に説くのに、「長沙参診出張書、有説有図義始舒、莫道人迎独無見、論中類脈是如何」という詩を一首作った。

ところで、寛延辛未には趙淞陽は八八歳であり、この

年令で渡海したと考えられない。従つて、年代について、なお考証の余地がある。

『杏林叢書・居家遠志』に、伊澤蘭軒が嘗て長崎で趙淞陽医案を購入した記録があるが、現在、その所蔵、内容について不明である。

享保戊申（一七二八）趙淞陽が竹林道本禪師を介して、香月牛山の『葉籠本草』の序文を書いた。それをきっかけに、香月牛山との間で、詩及び医薬学説について文通を交わしている。享保己酉（一七二九）、春林道生はその内容に「万里神交」の題をつけて、『葉籠本草』に付した。中日文化交流の一美談になっている。

以上のごとく、趙淞陽の長崎における逸事を顧みると、清医たちの来日の動機はともかく、客観的にみて、日本の漢方医学の発展に重要な役割を果たしたといえる。稿を終るに当たりご指導をいただいた酒井シヅ教授に深く感謝する。

① 順天堂大学医史学研究室・北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

② 日本医科大学東洋医学外来